

市川 航 企画展「視線のその先」作品解説

2018.11.20 (火) ~12.1 (土) @三木市立堀光美術館

本来、私たちが目にする様々な事柄は、無意識のうちに常にある制約（フレーム・枠）の中で見ているにすぎないのではないだろうか。私たちの目は様々なものを映し出すことで確かに視覚的には「見て」はいる。しかしそれがちゃんと「見えて」いるとは限らないのではないのだろうか。そんな自分自身への問いかけが写真を続けている理由のような気がしています。今回の展示は、自分の偏った視線（写真）で構成されています。

本展開催にあたり、三木市立堀光美術館 三木市教育委員会に厚く御礼申し上げます。また、ご協力頂きました関係者の皆様、すたじおぼっちの皆様、友人、知人、家族…そしてご高覧頂いたすべての皆様に心より感謝を申し上げます。ほんの少しでも皆様の視線が”何か”を「見ている」ことから、“その先”の「見えている」ことにも変わるきっかけとなればと、願っております。

2018.11.20 市川 航

1. 中心と周縁 (1階 展示室)

スナップ写真を10年以上続けている。街(町)のあらゆる事物をスナップする(ひったくる)ような写真を撮り続けている。自分の写真を撮る時の癖として所謂「日の丸構図」と言うものが多い見受けられる。おそらく、自分の中の全身のセンサーが、反応した事物に対して「真正面から対峙したい。」と言う気持ちの表れのような気がしている。しかし、写真の面白いところは、フレーム(枠)なるものが存在し、長方形だったり正方形だったり…と言う枠が決まっている。所以、本当に自分が反応した事物だけを写真と言う枠の決まったものの中に収めることは不可能である。いつだって日の丸とその周縁と言うものがついてまわる。しかし、その周縁には自分の意識外の事物が多分に写っており、それが写真の面白さ・奥深さのような気がしている。

今回の展示では、一枚の写真の構成要素の大半を占める日の丸(意識)部分を切り抜き周縁(無意識)の部分にスポットがあたるように展示する。写真の隅から隅までを見て頂ければと思う。

2. またたき (1階 小展示室)

カメラは、人間の目の構造を模してつくられたものである。カメラは、シャッターを切った瞬間にレンズを通して写った光景をフィルムや記録メディアに記憶していく。一方の人間は、もし、カメラと同じような構造をしているのであれば、目と言うレンズを通して写った光景をまたたきした瞬間に脳に記憶していつているのではないだろうか。また、人間は、寝ている間に夢を見るが、その夢はまたたきして記録した記憶の蓄積を目蓋の裏側をスクリーンとして再投影しているのではないだろうか。だとすると、本当はまたたきする度に、目蓋の裏側には、何らかの光景(「またたき夢」)が映し出されているのではないだろうか。そんな疑問から「またたき」と言う映像を作るに至った。この映像を見終わった後に、しばらく目を瞑ってあなたの目蓋の裏側には、何が写ったのか…。なぜ、その映像があなたの目蓋の裏側に現れたのか…。想いを巡らして頂きたい。

3. 「他人町 ~三木~」(2階通路)「Déjà-Vu と Jamais Vu」(2階展示室)

写真を始めた初期から続けているシリーズ。自分が長く住んでいる町でも、どんな町でも、いつだって他人のようによそよそしく、他人行儀に感じてしまう町。そんな他人行儀に感じてしまう町を歩いて撮りためた写真を、並べ・組み替えることで「他人(のようによそよそしく感じてしまう…だけど写真の中だけの自分の)町~三木」を展示する。

デジャヴとは、既視感(実際には、一度も体験したことがないはずなのに、すでにどこかで体験したことのように感じる現象である。)。一方、ジャメヴュとは、未視感(既視感とは逆に、見慣れたはずのものが未知のものに感じられる現象である。)。今回展示する作品群は、三木市立堀光美術館を中心とした、歩いてせいぜい5~10分程度で見つかる光景(写真)だけで構成されている。この美術館に何度も通われている方には、おそらく目にはしているが、初めて見る光景に映るかもかもしれない。逆に初めてこの美術館を訪れた方には、どこかで見たようなものに映るかもかもしれない。また、鳥の目となり上空から三木市立堀光美術館を見た際に、中心【美術館(見る場)・意識】とその周縁【美術館の周り(見ているようでいてはいない場)・無意識】となっており、今回の展覧会を開催させて頂く発端となった「中心と周縁」+「意識・無意識」・「見るということとは?」へと帰結していく。